

研究計画書（学部名）

<u>研究課題</u>	岩手県立大学における英語教育プログラム改革 ― TOEIC (Bridge)による本学学生の英語力調査とその分析 <div style="text-align: right;">高橋英也</div>
<u>研究期間</u> (最長3年)	平成20年度 ～ 平成22年度
<u>研究の概要</u>	
<p>本研究は、H20年度より導入された新たな英語プレイスメントテストである TOEIC Bridge のスコア結果とテストに付属する「属性欄質問項目」の回答結果の分析を通して、(i)これまでの本学における英語教育の成果や問題点について総括を行うとともに、(ii)本学学生の英語学力の実態を正確にとらえ、(iii)今後本学が目指すべき英語教育の方向性について検討する。そして最終的に、(iv)本学において理想的かつ実施可能な新たな英語教育プログラムを提示することを目標とする。</p>	
<u>中期計画における位置づけ</u>	
<p>現在の本学における英語教育は、全学共通科目「英語表現Ⅰ～Ⅳ」（以下、「英語表現」として）として学生に提供されており、1年次に2回実施されるプレイスメントテストの結果に基づいた「必修・4学部混成・習熟度別・25名以下の少人数」という4原則で実施されている。現在の中期計画においては、(1)プレイスメントテストの妥当性の検証、(2)習熟度別クラスに応じた成績評価の検討、(3)習熟度別クラスのあり方の検討、という3点が「英語表現」に関連する検討事項として掲げられている。つまり、「英語表現」の実施の中核をなすものがプレイスメントテストであり、それが理想的に機能しているか否かを検討する当然の必要性が中期計画に明示されているわけである。</p> <p>本研究は、H20年度より新たに導入された TOEIC (Bridge)によるプレイスメントテストのスコア結果、クラス分けの状況、および個々のクラスにおける教育内容を今後2年間継続的に観察・分析し、本学英語教育における実施の4原則という観点から TOEIC (Bridge)の本学におけるプレイスメントテストとしての有用性を検証することを中心的な目標の一つに掲げるものである。したがって、本研究の内容はまさに中期計画と合致するものであり、その成果は中期計画の達成に直結することが期待される。</p>	
<u>研究の目的</u>	
<p>①研究の背景</p> <p>本学における英語教育は、「英語表現」という全学共通科目として「必修・4学部混成・習熟度別・25名以下の少人数」という4原則に従って学生に提供されており、その中核をなすものは1年次学生を対象に年2回実施されるプレイスメントテストである。現在は「英語表現」担当の専任教員は共通教育センターに所属していることから、センターが本学の英語教育に対する責任部局として位置づけられ、英語の専任教員はセンター内で定期的に英語科科目会議を開催し本学における英語教育に関する諸問題について意見を交換し、時には必要な提案を全学に対して行っている。過去においては、6年前に、学部混成50名クラスでの週2回の授業形態から、学部混成25名・習熟度別クラスでの週1回の授業形態に移行し、単位未修得者数を大幅に減少させるなどの成果をあげてきた。</p>	

ここ2年ほどの英語科科目会議の中で話題としてたびたび取り上げられていることが、中期計画にも記されている「プレイスメントテストの妥当性の検討」である。6年前に導入した TOEFL ITP によるプレイスメントテストに基づく習熟度別・少人数クラス体制は、単位未修得者数を激減させるという成果をもたらしたが、テスト形式・問題内容・質において本学の実情と合致しない面が見られた。また、スコア算出法やテスト結果が学生の英語学力を正確に表現していないというケースも時として見られた。そのような点から、新たなプレイスメントテスト導入の可能性について昨年度初めより本格的に検討を開始した。そして、本学卒業生の英語運用能力に対する社会的な期待や評価、また、一方でのいわゆる大学全入時代における学生の基礎学力低下、盛岡短期大学部四大化後の共通科目「英語」のあり方など、本学の英語教育を取り巻く様々な問題に対応していく必要性が生じてきたことも考慮し、英語教育プログラム「改革」の第一歩としてH20年度よりプレイスメントテストとしてTOEIC(Bridge)を導入することを決定した。

本研究は、新たな英語プレイスメントテストである TOEIC(Bridge)の本学における妥当性の検証を、本学の英語教育の責任部局であるセンター（特に、英語科科目会議）が行うものであり、センターの全学の教育活動における役割という点から十分に意味のあることと位置づけられる。

②研究の目標

本研究の目標は次の4つに大別される。まず第一に、「TOEFL ITP によるプレイスメントに基づく従来の本学英語教育の成果や問題点の総括」があげられる。TOEIC(Bridge)は、これまで実施してきた TOEFL ITP と比較すると、英語運用能力測定の基準として一定の対応は見られるものの、テスト形式・問題内容・スコア結果の算出法などにおいて非常に異なっており、そのテスト結果に基づいたクラス分けの実態等に変化が見られることは当然予想される。年度間の学生の学力差など考慮されるべき条件は多少あるが、それらを除いた一定の規則性を TOEFL ITP と TOEIC(Bridge)のスコア分布やクラス分けの実態に見出すことで両者を比較・分析し、さらに個々のクラスでの教育内容・成績評価方法等も調査することで、TOEFL ITP によるプレイスメントに基づく従来の本学英語教育の実態が明らかになると考えられる。

第二は、「本学1, 2年生の英語学力の実態調査」である。TOEIC(Bridge)の大きな特徴として、解答用紙に受験者への質問・アンケートを可能にする「属性欄」が付属していることがあげられる。質問項目は6項目を実施例（大学）が任意に設定可能し、別紙質問紙を用意して受験者に個々の質問に対する回答を解答用紙の「属性欄」にマークしてもらうというものである。実際に、本学における第1回目の TOEIC(Bridge)である4月実施のH20年度新入生英語プレイスメントテストにおいては6項目の質問からなる質問紙を受験生に配布した。その質問項目はテスト受験生の入学区分や出身県や英語学習歴など、英語学力の背後にある様々な要素を明らかにするために設定されたものとなっている。この「属性欄」を今後3年間のプレイスメントテストにおいて活用し、計6回分のデータを収集しそれを分析することで、本学1, 2年生の英語学力に関する調査を行う。従来の学部間の比較に加え、県内外の英語学力の比較や入学区分ごとのクラス分けの実態把握等の詳細な調査が可能である。学生の現状を正確に把握することは、本学にとって理想的な英語教育の方向性の検討や具体的プログラム構築には不可欠なものである。

第三は、「TOEIC(Bridge)のスコアと英語運用能力の相関関係に関する調査」である。具体的には、九州産業大において開発された Can-Do 尺度に見られるような TOEIC(Bridge)のスコアと学生の英語運用能力の相関表を作成することで、教員間で共有できる教育内容の基準を得ることが出来るとともにシラバスの内容や成績評価の方法の検討も可能となる。上記の「本学1, 2年生の英語学力の実態調査」の結果とともに、次に記す本研究の第四の目標に接近する際の最重要な基礎となると考えられる。

第四は、「本学が目指すべき英語教育の方向性の検討と、具体的な英語教育プログラムの提案」である。従来の英語教育の総括と学生の実態調査の結果と本学版 Can-Do 尺度に基づいて、本学の学生にとってどのような英語教育が必要であるのか、また、本学が学生にどのような英語教育を提供し卒業時にどのような英語力を身につけさせることを期待するのか、という観点から本学にとって理想的な英語教育のあり方を具体的に提示することが本研究の最終的かつ究極的な目標である。

③期待される効果

本研究の掲げる上記4つの目標が達成されることで、本学におけるこれまでの英語教育が整理された形で総括されるとともに、今後どのような英語教育が本学学生に必要なものであるのか、またそのために何をどのように整備していかなければならないか等が明らかになると考えられる。その過程で、中期目標に示されている検討事項については十分な検討結果を提供することが出来ることになる。また、共通教育の枠外での英語教育（学部による専門英語やメディアセンター等を利用した自学自習システムの開発など）の実施・検討に対してもデータを提供でき、本学全体という大きな枠組みでの議論へも波及する可能性も考えられる。さらには、入学区分別の英語学力の把握は入試制度の検討にも影響を与えることになるであろう。

学外に対する影響も考えられる。大学における TOEIC を全面的に活用した教育実践事例や単位認定・成績評価の活用事例の報告は様々な研究会で見られるが、(TOEIC テスト結果の詳細な検討・分析に基づいていながら) TOEIC に教育内容を依存しないプログラム・カリキュラム構築の事例は TOEIC 活用のあり方としては非常に珍しい。TOEIC による英語運用能力測定力は最大限に利用しながらも TOEIC のスコア自体を教育目標とはしないというスタンスで構築されたプログラム・カリキュラムは、もし研究会等で発表されれば多少なりともインパクトを持つものであるのは間違いないであろう。

研究の計画

①研究の優位性・独創性・新規性

本学の共通教育において英語教育はコンピュータ教育とならんで最重要といえる位置を占めているにもかかわらず、これまでその内容や方法に関して詳細な検討・分析が与えられたことはなかった。その意味で、本研究は本学における先駆的な共通教育関連の研究であると言える。さらに、今年度の共通教育センター運営方針においては「英語（外国語）教育の充実・改革」が重点的項目の一つに掲げられており、本研究が共通教育センターのプロジェクト研究として相応しいテーマであると言える。また、TOEIC 関連の英語教育研究という側面については、上記の「期待される効果」の後半で述べた通り、他大学に対してもインパクトを持つ成果が得られる可能性のある研究であると言える。

②研究の実施方法・取組

本研究の実施は、以下に挙げる（1）から（4）のような、プレイスメントテストの実施とその結果分析および課外での学習支援の実施とデータ収集・分析に基づくものである。さらに学外で開催される TOEIC や共通教育関係の研究会へ参加し、本研究にとって補助的なデータや情報を収集するとともに本研究の成果発表も行う予定である。

- (1) 20年度から22年度の1、2年生を対象とした TOEIC(Bridge)の成績推移の比較検討
- (2) 20年度から22年度新入生の学部別・入学区分別・出身県別の英語学力調査

(3) TOEIC(Bridge)の成績と授業における英語運用能力の関連性に関する調査

(4) 英語教員(専任)による課外での TOEIC 対策講座の実施と受講者を対象とした学内 TOEIC 受験(就職対策で受験希望の学生の受験も許可する)の実施と成績推移の調査

以上の4種の調査により収集したデータを上記した本研究の4つの目標にしたがって分析することで本研究は実施される。